

徒然草「猫また」の段を読む

川平 敏文（日本近世文学）

はじめに

徒然草の中で誰もが知っている章段の一つが、第八九段、いわゆる「猫また」の段であろう。猫またという怪物が出るという噂を聞いた法師が、夜中に家に帰る途中、何物かに飛びつかれて、「猫まただ！」と絶叫する話である。有名な章段であるが、何度読んでもおもしろい文章なので原文を全部掲載しておこう。まま解説が必要と思われる箇所には（ ）で現代語を補っている。

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経上りて（年をとって）、猫またに成りて、人とする事はあんなるものを」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の（何阿弥陀仏とかいった名前の、連歌を好んだ法師で）、行願寺の辺にありけるが聞きて、「独り歩かん身は心すべきことにこそ」と思ひける頃し

も、ある所にて夜更くるまで連歌して、たゞ独り帰りけるに、小川の端にて、音に聞きし（噂に聞いていた）猫また、あやまたず、足許へふと寄り来て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はんとす。

肝心も失せて、防かんとするに力もなく、足も立たず、小川へ転び入りて、「助けよや、猫またよやよ」と叫べば、家々より、松（松明）どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こは如何に」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物（連歌の会で出されていた景品を）取りて、扇・小箱など懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。希有にして（やつとのことで）助かりたるさまにて、這ふ這ふ家に入りけり。

飼ひける犬の、暗けれど、主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

これを読んで私などが思うのは、まさしく落語だということだ。最後の一文に至るまで、読者は猫またの正体を知らない。猫またに襲われ、「頸のほどを食は」れんとした法師の恐怖が、切実な感情として共感される。そして最後の一文で話は急転直下、思わず笑みがこぼれる。いわゆる「落ち」である。近代の注釈家の誰もが、その文章の巧妙さを称えている。

私はひそかに、噺家と言つて語弊があるなら、説教者と

しての兼好の素質に目をつけている。それは後述するとして、ともあれこの一段を読んで現代人が感じるのは、まずはその叙述の「おもしろさ」であろう。我々はそれ以上の「意味」を、あえて考える必要はないと思っている。

ところで、すでに本誌でも書いたように、徒然草は江戸時代にもたいへんよく読まれていた。しかし、これも度々言うように、江戸人は近代人とはほとんど別人種であつて、彼らが我々と同じような読みをしたとは限らない。彼らはどんな読みをしていたのか。

一 嗤う兼好

江戸時代の徒然草注釈書の嚆矢、秦宗巴の『寿命院抄』（慶長九年（一六〇四）刊）には早くも、いわば江戸的な考えが出てくる。

心のとりどりに愚なる事を論じて、前段に次第る者也。

すなわちこの章段は、心がさまざまに愚かなる者のことを論じて、前段に繋げたのであるという。前段とは、自分は小野道風の書いた『和漢朗詠集』を所持していると言つて自慢する人の話。ある人が、「道風は『和漢朗詠集』成立以前に亡くなった人だから、それを書けるはずはないでしょう」と言うと、「だからこそ貴重なのだ」と答えたという、

これも小咄風の章段である。

宗巴は、この話の続きであるから、この段もやはり愚かな人の話がかかれていたのだ、という。つまりこの話の重心を、法師の「愚かさ」に置いているのであるが、では、この法師のどこが愚かなのだろうか。

『寿命院抄』から約六十年の後に高階楊順の『徒然草句解』（寛文元年（一六六一）刊）には、それが次のように詳しく論じられている。

この段は、前の段でたいへん愚かな者のことを述べたのを受けて、心が愚かで迷いのある者の眼前には、本来無いはずのものが現われてその身に害をなすということを述べたものだ。しかしそれは、もとはと言えば、みな自分が原因である。そここのころの道理を表し、このような煩いのある人の心を、恥じ改めさせようとしたのだろう。

要点を整理しよう。まず第一に、猫またを恐れたのは法師の心に迷いがあったから。だからこのような目にあつたのだ、ということ。第二に、心さえしっかりしていればこのような失敗は防げる。兼好はこの話を示して、心に迷いのある者に注意をしようとしたのだ、ということ。この二つを、楊順は言っている。

法師の「心」を批判する人は他にも多い。『句解』よりも少し前に出た松永貞徳の『慰草』（慶安五年（一六五二）跋

刊)では簡潔に、

臆病なる者の前には、無き化けもの現ずる事をありありと書きのせはべり。

とある。ここでもこの法師は「臆病」と言われており、やはり批判的に扱われている。また黒川由純の『徒然草拾遺抄』(貞享三年(一六八六)写)では、

この段、驚き恐れて本心を失ひたる事を嘲りて云へり。兼ねて教とす。

とある。本心とは即ち平常心。驚き恐れたために平常心を失ったことを、兼好は嘲笑していると見るのである。

ここには、現代の我々がまず第一番に感じるような、話のおもしろさへの指摘がまったく見られない。あるのは法師への、兼好の批判的な視点の指摘のみである。

二 犬の忠義

さらに江戸中期になれば、こんな評も出てくる。これは井村信成という人の『徒然草隠解』(宝暦十二年(一七六二)写)という、写本の注釈書である。信成は大坂の人で、書家として著名であったが、伊藤仁斎に始まる古義学の信奉者でもあり、その視点から論語・孟子と徒然草とをからめて論じたのが本書で、非常にユニークなものである。

『隠解』では、まず始めに、

「何阿弥陀仏」といってその名を確かに言わないのは、この法師を誇るために、わざと実名を隠して言ったのだ。

と指摘する。これは、「実名が記されない場合は基本的に兼好がその人を批判したものである」という、彼独得の「読み」の理論を適用したものだ。理論や法則というものは、それを適用することによって筋が通り、思わぬ発見をすることもあるが、逆に例外的なものを許容し得ない窮屈さもある、謂わば諸刃の刃だ。しかしこの場合は、前述のごとき法師批判的な解釈史の流れに則って、それを理論的に裏付けた形になっている。

信成がユニークなのはここからである。彼は言う。

獣けものというものは、「忠義」ということを頭で理解できる生き物ではないが、この犬は日頃飼ひ馴らしていたがゆえに、暗いところでも主人だと知って飛びついたのだ。なのに法師が臆病の一念で、犬の志を台無しにしたのは残念だ。犬だったからよかったものの、もしこれが人間で、その人の志を台無しにしたのだったら、どれほど悔やまれるだろう。

連歌を嗜むほどの人なのに、この振る舞いは、あるまじきことである。どれほど連歌の達人と言われているとしても、心が定まらないときは、人間として見るに足らないものである。

信成は、犬の忠義という側面に注目する。法師が猫またの噂を聞いて怯えている、その臆病さがいけないと言っているのではない。怯えたがゆえに、飼い犬の忠義を無駄にしまったのが問題だというのである。

そして、もしこの犬が人間だったら、という仮定をする。もちろん、いくら忠義心に篤いからといって、暗闇から飛びかってくる人はいないだろうから、これはあくまでも比喩としての仮定である。つまり、もし人間が忠義を示そうとしているのに、自分の心の迷いのためにそれに気づかなかつたとしたら、どんなに悔やまれようか、というわけだ。

さらに、「連歌を嗜むほどの人なのに」などという言い方をしているところは注意されるべきである。後でも触れるように、連歌はその発生時においては通俗的な要素が多分にあったようだが、江戸時代にはすでに雅の文芸となっており、和歌に準ずる高級の文化であった。すなわち俳諧や戯作などの俗の文芸とは身分が違っているのであって、連歌師の中には幕府から召抱えられている人もいたのである。しかしいくら連歌の達人と言われる人であろうとも、心が定まっていない人は見劣りがする、と信成は言うのだ。

かくのごとく、江戸時代の人々は法師の「心」の不安定さを問題とし、そこからある種の教訓を読み取ろうとする。そこに、現代人が感じるような滑稽さや、叙述の妙という

評価は聞くことができない。

だからといって、江戸人がこの話におもしろさを感じていなかったかといえば、そんなことはなからう。やはり江戸人が読んでもおもしろかったであろうし、話運びの巧みさには感嘆せずにいられなかったであろう。しかしそれをいったん正面から評じようとするとき、彼らはその奥にある教訓的な「意味」を読み取らずにはいられない。そういう頭の構造をしているのが、江戸人なのである。もちろんその「意味」づけには、江戸人の文学観、あるいは広く彼らの価値基準が横たわっているのであるが、ここでそれを細叙する余裕はない。

ともかく滑稽さ、叙述の妙などというものは、彼らにとつてあえて指摘するまでもない表面的な事象でしかなかった。徒然草において、そういう修辭的な部分が作品の価値として注目されるようになるのは、主に明治以後といつてよいだろう。江戸人はこの書を文芸書であるとともに、教訓書であると捉えていたのだ。

現代では、「教訓」と「文学」という二つの要素は親和性が薄い。特に坪内逍遙以後は、むしろ教訓から離れたところにこそ文学が成り立つと考えられてきた節もある。しかし江戸時代は、教訓＝文学といつてもよい認識であつて、教訓は文学を成り立たせるために必須の要素であつた。す

なわち江戸人にとっては上のような「読み」こそが、徒然草の文学的な価値を正確に評価したことになるのである。それが兼好の真意に近いかどうかはともかく置くとしても。

三 近代の読み

実は江戸時代のみならず、明治も終わりに近づくまでは、上のような教訓的な「読み」が、この段の解釈の中心であった。十指にあまる注釈書類が、みな一律にそうなのである。しかし考えてみれば、これは当然と言えば当然の仕儀である。なぜなら明治の終わりくらいまでの学者は、みな江戸の教育を受けた人だったからだ。

そんな中でも、演劇改良運動に加わったことで知られる学海居士こと依田百川の『徒然草評釈』（刊年未詳）は、近代的な評価につながる視点がいち早く現れたもので、注目される。学海は「猫またよやよや」のくだりに、

滑稽に書ける体なり。そのさげびたる詞など、げにさもありぬべく見えて妙なり。又前よりよみ来れば、まことに猫またの如くおもはせ、後に至りてはじめてそれにあらざるをいふ。

と、これが滑稽の叙述であること、そして話の展開に巧さがあることを指摘している。江戸時代的な、法師への批判が述べられていないという点で、これは画期的なものであつ

た。

ところで、「滑稽の発見」と大げさに言えば言えるこの解釈史上の事件のあと、近代人はこの話に、さらにもう一つの意味を見出す。内海弘藏の『徒然草評釈』（明治四十四年刊）である。内海は、

文の趣は、その滑稽な趣の叙事の上にあるのはいふまでもないが、これに伴うて別に、当時の連歌師の俗悪な風を嘲る意味がこめられてある。

と言っている。「滑稽な叙事」がきちんと指摘されているところに近代的な視点を見出すことができるが、後半ではそれに加えて、「当時の連歌師の俗悪な風」を兼好が嘲って書いた気味があると指摘する。

この段の法師は「夜更くるまで」連歌に興じていた。そしてその帰り道に猫またに出くわし、せっかく獲得した賭物（景品）の扇や小箱などを川の中に取り落とし、台無しにしてしまう。その叙述の中に、当時の連歌師への嘲笑が込められているというのだ。

この解釈を引き継ぐのが富倉徳次郎・貴志正造の鑑賞日本古典文学『方丈記・徒然草』（角川書店、昭和五十年）である。本書は次のように言う。

当時の連歌師のある者は、民間芸術家というよりは、むしろ幫間的ほうかん存在であったといってもいい。（中略）民

間の大衆相手の文芸人に対して、平安朝以来の貴族文芸の伝統に敬意を持つ兼好としては、必ずしも好意は感じ得なかつたであろう。この一文で、兼好の筆に、多少なりともこの連歌師に対する嘲笑の色合いが見えたとすれば、そうした彼の心を示すものといつてよいであろう。

帮間とは「太鼓持ち」とも言い、客にべつたりと張り付いて、酒宴を盛り上げるのを職業とした人のことである。少し控えめな言い方であるが、やはり当時の連歌師への嘲笑が見え隠れすると述べている。

この、内海が「俗悪な風」と言い、富倉・貴志が「帮間的存在」と言う当時の連歌、あるいは連歌師とは、いったいどのようなものだったのだろうか。

有名な『二条河原落書』(建武元年(一二三四)成)に、

京・鎌倉をこきまぜて 一座そろはぬ似非連歌

在々所々の歌連歌 点者にならぬ人ぞなき

譜第非成の差別なく 自由狼藉の世界也

という一節がある。これは、当時の世相を口さがなく批判した、匿名の文章の一節なのであるが、そこには当時の連歌についても言及がある。ここでは、京都の公家も鎌倉の武家も区別なく、形式にこだわらぬ連歌に打ち興じている様が「似非連歌」とされ、また都でも田舎でもそれが流行して、誰でも点者(先生)になれるような状態であること

が批判的に述べられている。

連歌の歴史についての詳細は専書に尋ねてもらいたいだが、そもそも連歌は、正式な歌会の合間に行われるような余興的なもの、いわばオフ・レコの文芸だった。謂わば記録されざる文芸である。したがって作品の芸術的価値よりも、遊戯性すなわち「座」そのものを楽しむ空気が強かつた。

たとえば猫またの段の法師が、水に濡らして台無しにしてしまった「賭物」の景品。現代人からすれば、文学で賭けごとをするとは何と不届きな、などと批判的に思う人もいるかもしれないが、当時の公家の日記類を見ると、賭物の用意された連歌会の記録はたくさん出てくる。少し古いのが、『後鳥羽院御記』の建保三年(一二二五)五月十五日には、次のような記録が残っているという。

この日は、お金を賭物とした。普通の句のときは百文、良い句のときは二百文を得られる。百韻のうち、私は数句詠んだ。私の取り分は、二貫七百文であった。(中略)とても楽しかった。酉の刻(夕方六時頃)に終わり、食事をとったあとに帰った。

(綿貫豊昭『連歌とは何か』〈講談社選書メチエ・二〇〇六年〉九七頁を参照して要約)

扇や小箱だけではなく、お金まで懸けられていたのだ。しかも、そこに背徳の気分は少しもない。このように賭物は、身分が高い人々の間でも公然と行われていた。が、兼好の

時代になると、それが身分を問わず洛中洛外のどこでも行われ、点者を気取る者がたくさん現われてきた。そのあまりの「自由狼藉」ぶりに、教養ある「落書」の筆者は苦言を呈しているわけである。

では兼好本人は、当時の連歌をどのように見ていたか。徒然草ではこの段以外に、第八〇段、第一三七段に「連歌」が出てくるが、そこでは当時流行の風俗というような書かれ方をしており、必ずしもよい文脈では語られてはいないとすれば、この連歌師への嘲笑という見方は、確かに一面の真実を孕んでいるような気がする。

総じて、叙述の滑稽性と、連歌師への嘲笑的視点の指摘。これが、近・現代における猫またの段解釈の二大潮流と言えよう。法師の「心」のあり方を問題とし、この話から教訓性を見出した江戸人の感覚は、もはや完全に忘れ去られた感がある。

おわりに

だがしかし、である。むしろ私は近代が捨ててしまった、この話の教訓性の方をもう少し見直したい気分なのである。ここから先は私の現在の思いつきを綴ったものであるから、作りかけのノートと思ってもらいたい。

この章段の前後三段は、すべて滑稽譚である。前の段は先ほど紹介した小野道風筆『和漢朗詠集』を所持していたという人の話。後の段はこうである。ある稚児ちごに主人が、おまえは最近「やすら殿」という人のもとに度々通っているようであるが、その人は在俗の男か、法師かと尋ねた。すると稚児は袖を掻き合わせて、「さあどうでしょう。頭をば見ませんもので」と答えたという話。

私にはこれら三話が、江戸の噺本（落語のネタ帳）から抜き出したもののように思えてならない。江戸の噺本には滑稽の中におのずからなる教訓というか、寓意が含まれている。特に初期のそれには教訓の気味が色濃く残っているが、これは落語が説教という話芸の中から生まれたことと大いに関係している（噺本・落語の歴史については、関山和夫氏の『説教の歴史』（岩波新書）が手軽で大いに参考になる）。

例えば江戸初期の名説教僧であった安楽庵あんらくあんざくでん策伝は、『醒睡せいすい笑しょう』なる噺本を編述しているが、この本に載せられている話は、確かにたんなる滑稽譚と捉えれば捉えられるけれども、少し見方を変えれば、すぐに教訓に転化できる体のものである。実際、策伝は自らの説教のなかで、これらの笑い話を教訓に捻って利用していたに違いない。

私は、猫またの段を含むこの三話だけではなく、徒然草そのものの中に、兼好の説教者としての立ち位置が見える

ような気がする。すなわち徒然草全体が、いわば彼の説教のネタ帳であって、滑稽譚もそのなかの一部、というようなイメージである。それはまた文芸ジャンルとしての「説話」と、とても近い。

徒然草はいちおう「随筆」に分類されているが、言うまでもなく、「随筆」というジャンルは後代人が与えた仮の括りではない。「随筆」のような「説話」があっても一向に構わないのだ。

そう思っているいろいろ調べものをしていみると、徒然草の説話性に注目している論考は、結構早くからあったことに気づく。しかしそれらで扱われている「説話的」というのは、主に逸話・奇聞・滑稽譚といった、個別具体的な話の内容（筋、趣向）そのものを指し、徒然草という作品全体に底流する、前提としての説教的な教訓性や寓意性に注目しているものではないさそうだ。

猫またの段に話を戻せば、確かに叙述の滑稽性は指摘すべきであるし、連歌師への嘲笑的視点も当たっているかもしれない。しかし私には、近代人が見捨ててしまった江戸時代の教訓的解釈が、徒然草という作品全体に底流する問題を、深く見透かしていたように思えてくる。

もっとも、ここで言う教訓性とは「おのずからなる教訓」であって、兼好自身がここから直接に教訓を読み取ってくれ、と言っていたのではなかったと思う。ともすれば教訓

にも転化しうる、そういうコンテクスト（説教的言説構造）の中で、語っているということである。とすれば江戸人は、この「ともすれば」の部分で、はっきりと書いてくれたということになる。

江戸人の残してくれた言説から、そのような徒然草論への構想が紡げないか、試行錯誤している今日この頃である。

*原文の引用は読み易さを考慮して、表記の一部を改めたところがある。



万治元年刊『徒然草古今鈔』より

（本学准教授）